

教育史の基礎

“Our minimum Essentials of Educational History”

乾 隆 次

ここ数年、ベビーブームの波が小学校に押し寄せ、学童の激増にともない教師の大不足を招いたので、小学校教員の資格認定試験が実施されている。本年度で第3回目である。

高卒で満20才以上であれば誰でも受験できるので全国で数千の応募者がある。合格者は10%未満であるが、僅か半日で2級の免許状を授けられ、大学卒の資格が与えられるのであるから勤労者には朗報である。その問題は、文部省が責任をもって作っている国家の基準であろうから、この解答が不成績の者は大学卒の資格がないとも考えられる。2年乃至4年も学窓で教師の手ほどきを受けた学生が、独学で仕事を持ちながら生活と戦っている一般人よりも劣るとあっては最高学府の名に値しない。指導担当者としては心痛の至りである。実力主義の時代でただ、のんびりと学生生活を送っているのは、きっと社会の生活戦線から落伍してしまう。そこで思いついたのが、学生諸子に自己の学力を診断してもらう手段を提供することであった。今回は紙数の都合で教職教養のなかの、教育史のみに限定してみたが、多くの大学では教育原理に含めて教育史にはあまり時間を割いていない。

大学に2年以上在学し、62単位以上を修めたものは、一般教養は免除されるが、教育原理や教育心理は免除の特典がない。

教師の講義の範囲だけのテストでも、60%も取れない者ではあるが、ひとつ未習の、未知の問題に挑戦してみたらどうであろうか、解答を見て、自己採点した資料を集積して、現在、いかに在るかをキャッチしたら、将来いかに在るべきかの啓示が得られるであろうから、それに対応した指導方針を樹ててみたいのである。この紙面は些細なものではあるが、氷山の一角として、テキストに使用する予定であるから、保存を忘れないように注意する。

さて、まえがきは、この位にして本題に入るとしよう。

昭和48年と49年の既出問題を解明して本年度の予想をするのが理想であるが、少なくとも6割以上を正解すれば大学卒の資格があると言っても良いだろう。

教職専門科目に限定するとしても、広大な一般教養の分野がその背景に展開されている。

第1回の問題は、エミールに表現されている教育思想を述べて、その作者を、コメニウス、ルソー、ヘルバルト、デューイ、ペスタロッチーのなかから選び、その書名を、民主主義と教育、一般的教育学、ゲルトルートはいかにしてその子を教えるか、大教授学、エミールのなか

教育史の基礎

から選び、その出版された時代として、16世紀、17世紀、18世紀、19世紀、20世紀の5個の選択肢が示されている。この解答には、良く暗誦している者は数分も要しないであろうが、欧米の近代教育史の全般を概観していなくては出来ない大きな問題である。高校のテキストには、デューイ位しか記載されていないから、他の人名は専門的に西洋教育史や哲学史を研究しなければ、解答不能である。各府県の採用テストには、このほかに、ソクラテス、プラトン、アリストテレス、ロック、カント、ヘーゲル、フレーベル、マルクス、スペンサー、などが顔を出す程度であるから、適切な問題である。

然しながら、この認定試験を継続していくとなると重要問題が底をついてしまって、最善から次善へ、ベストからベターへと移行せざるを得ないので、哲学者、倫理学者にも手をのばして、浅くとも広汎な知見を持っていることが大切である。択一式のテストと論文式のテストの特色を考えて、第一次の合格をねらうのが賢明である。主要人物を表示すると第16世紀では

モンテーニュの「随想録」

トーマス・モアの「ユートピア」

マキヤヴェルリの「君主論」

エラスムスの「自由意志論」「幼児教育論」

第17世紀に入ると

コメニウスの「大教授学」「世界図絵」

フェヌロンの「女子教育論」

ロックの「人間悟性論」

ベーコンの「新オルガノン」

デカルトの「方法序説」

ホッブスの「リヴァイアサン」

パスカルの「パンセ」

スピノザの「エチカ」

ライプニッツの「形而上学序説」「单子論」

ガリレイの「力学対話」

第18世紀では

ヒュームの「人間本性論」

モンテスキューの「法の精神」

ルソーの「エミール」「不平等論」「社会契約論」「新エロイズ」

バゼドーの「初歩教科書」

ザルツマンの「かにかの書」

スミスの「国富論」

ペスタロッチの「隠者の夕暮」「リーンハルトとゲルトルート」「ゲルトルート児童教育法」

教育史の基礎

カントの「純粹理性批判」「永久平和論」

コンドルセの「人間精神進歩史」

フィヒテの「ドイツ国民に告ぐ」

マルサスの「人口論」

第19世紀では

ヘルバルトの「一般教育学」

ヘーゲルの「精神現象学」「法哲学」

フレーベルの「人間教育」

シュライエルマッヘルの「教育学講義」

キルケゴールの「あれかこれか」「死に至る病」

ミル J.S. の「自由論」「功利主義」

マルクス、エンゲルスの「共産党宣言」

スペンサーの「教育論」「社会学原理」

ダーウィンの「種の起源」

ニーチェの「ツアラトウーストラ」

マルクスの「資本論」

ナトルプの「社会教育学」

ケイの「児童の世紀」

第20世紀に入ると

ザントの「民族心理学」

ビネーの「知能の研究」

ジェームズの「プラグマチズム」

ホールの「青年期の心理」

モンテッソーリの「科学的教育方法」

ケルシェンシュタイナーの「公民教育の概念」

フッサールの「純粹現象学」

クルプスカヤの「国民教育と民主主義」

デューイの「デモクラシーと教育」

パーカストの「ドルトン案教育」

デュルケームの「教育と社会学」

ピアジェの「児童の言語と思想」

シュブランガーの「青年心理学」

ラッセルの「教育と社会体制」

ハイデッガーの「存在と時間」

教育史の基礎

ヤスパースの「哲学」「大学の理念」

サルトルの「存在と無」

キルパトリックの「プロジェクト・メソッド」

フロイトの「精神分析入門」

ソーンダイクの「試行錯誤」「動物の知能」

以上で、大学の教職課程の主要なテキストに記されている西洋教育史の人物を列挙したのであるが、2世紀にまたがっている人物は、その出題の意味を考えて、ウエイトの多い方に所属させるより仕方がない。数種のテキストの目次なり、インデックスを並べてみて、共通の項目を拾いあげていくと、同じ編者のものでも案外共通のテーマは少ないもので、まことに細分化され、担当執筆者の個性が表示されて統一がない。

教育原理と教育心理学が複合され、数か国の人名、地名が入りまじると判断に苦しむことが多いし、心理学の分野では新進の少壮学徒の論文を生硬なままに引用してあるので、予備知識のあるものでも迷ってしまう。われわれは教育学者を夢みているのではなく、現場で生動していく子どもを育てる手段として心理学を研修しようとするのであるから、基本的な中心書をきめて、補足をしていけば経済的である。毎年吞吐される新説を送迎していくのは無駄である。そのために私は、昭和24年に学芸図書から発行された文部省著の「教育心理、一人間の生長と発達」を愛読している。教育心理学の研究法、児童の生活とその活動。人間はどのように発達するか。学習とは何か、教科の心理が、422ページに、平易にまとめている。恐らく原稿は30年も昔に出来たものであろうが、出題の原典のような気持がする。引用の原書から、戦後の新教育の故郷を見るようだ。執筆者は今も第一線で活躍されているヴェテラン揃いである。

さて、心理学の方はしばらくおき、教育史にもどるとしよう。

第1回の第1問は前述の通りであるが、第2回の第1問はいささか趣を変えて、文科、理科の双方にわたって発問し、各群から、それぞれ1つを選んで説明せよとしている。

- ア群
1. アリストテレス (BC384—322)
 2. レオナルド・ダ・ヴィンチ (1452—1519)
 3. ガリレオ・ガリレイ (1564—1642)
 4. 孟子 (BC372—289)
 5. 森林太郎 (1862—1922)

- イ群
1. グレシャムの法則
 2. エネルギー恒存の法則
 3. マルサスの人口法則
 4. メンデルの法則
 5. ピタゴラスの定理

- ウ群
1. 違憲立法審査権

教育史の基礎

2. 実存主義
3. アレルギー
4. ppm
5. 核酸

- エ群
1. ビーグル号航海記
 2. エミール
 3. 三四郎
 4. 方法序説
 5. 古事記

これは、西洋史、東洋史、日本史、経済学、物理学、社会学、生物学、数学、法律学、哲学、医学、工学、地理学、教育学、文学、歴史学のすべてを網羅したなかから、4個を選ぶのであるから、個人の得手、不得手、専攻のいかんによって理解に濃淡が生れてくる。

与えられた時間により、説明の程度に工夫をこらす必要があるが、腕だめしにメモを取って見るがよい。当人の筆記の速度にもよるが簡明が大切である。記述の内容を、所要の配分時間に合せて加減しなければ、1問あたりの配点は平平均分であるから、第六感で素早く仕上げるべきで、解答用の選択肢のない場合は沈思長考するのは失敗である。

実例として、1. アリストテレスを解答してみる。サンプルを各事典や辞典にとるのが便利であるから、初歩のものから、高次のものに累加形式で述べてみよう。

○ 中高生向 三省堂の学習百科事典

＊ギリシアの哲学者、プラトンについて哲学を学び、プラトンの死後、マケドニアの王子アレキサンダーの教師となり、アテネの郊外に学校を開いて青年を教育した。哲学、倫理学、心理学、政治学、詩学、天文学と広い範囲にわたって、すぐれた研究を完成し、後世学問の発達に多くの影響を与えた。＊

○ 高校生向 魚澄氏総合歴史辞典

＊ギリシアの哲学者、プラトンの弟子、アカデミアに学び、アレキサンドロスの師となり、前335年、リュケイオンの学園を開く。「形而上学」ではプラトンの二元的アイデア論を排撃し、「論理学」の三段論法、演繹法、帰納法の論説は名高く、「倫理学」「政治学」初め著作多く、諸学問の基礎を形成した。＊

○ 大学受験用 吉岡氏の世界史事典

＊ギリシア最大の哲学者、トラキアに生まれ18才の時アテネに来て、プラトンのアカデミアに学び、20年間そこにとどまり、すでに名声をあげた。41才の時アレキサンダー大王の師となり、その後、前335年アテネに帰り、リュケイオンに学園を開いた。

彼は散歩道で学を講じたので、その学派を逍遙学派という。大王の死後、反マケドニアの風潮に圧迫されてアテネを脱出し、エウボイアのカキルスで死んだ。彼はあらゆる学に通じたが

教育史の基礎

古代の学問を整理し、体系づけた功績は大である。彼によれば、存在一般とその原因についての学—形而上学または神学—が最高位にあり、第一哲学と数学、自然学を理論学とし、実践学はポリスの動物としての人間の行為の学として政治学と倫理学を意味している。そのすぐれた論理学、あるいは靈魂論も注目すべきである。その巨大な学問体系はスコラ学にとりいれられて中世思想界の本宗となった。

○ 高等教員指定参考書 有高氏 世界史精講

「プラトンの唯心論とデモクリトスの唯物論を学んで、理性と現象との調和をはかり、観察と実験とを重んずる実証的科学的傾向をもち諸学を総合して体系をたて分類をなし、各自の研究方法与内容とを与え、形式論の三段論法を大成したが、平常樹間を散歩しながら教授したので、その一派を逍遙学派といわれた。」

○ 一般向 平凡社の小百科事典

ギリシア哲学を大成、トラキア生れのイオニア人、マケドニア王の侍医の子、プラトンに師事20年、マケドニアのギリシア征服後のアテナイ東郊でリュケイオン学園を創設、ペリパトス派（逍遙学派）の開祖、論理学を初めて学問的に組織、形而上学ではあらゆる存在者を形相と質料により説明、純粋な形相が不動の動者、思想の思想、神であるとした。

プラトンの観念論的理想主義に対し、経験的現実主義、中世スコラ哲学の組織化を可能にし、さらに近世及び現代の哲学にも深く滲透、著書は論理学、形而上学、自然学、政治学、修辞学、詩学である。

○ 学術的な東京堂世界人名辞典

テリストテレスによれば、一切の存在に共通する原理は、形相、質料、運動、目的の四因であり、質料は形なき可能的実態であり、それを現実的に形成するのが形相である。質料なき形相はただ神のみである。神は宇宙の最高目的である。倫理的に彼は中庸の徳を重要視するが、倫理的課題は国家生活においてのみ実現されると見た。なお政治的には君主制、貴族制、共和制の3政体を認め自由主義的立場をとった。

○ 岩波の哲学小辞典によれば

彼はあらゆる生成過程を現実性（形相）への可能性（質料）の転化発展として説明する。

彼はプラトンより以上に理論的生活を尊び実践的および生産的生活を見下げたので、彼の哲学は非現実的、非実践的であった。

○ 専門的な大島氏の新倫理辞典には、

彼の実践哲学は人間の幸福、よく生きるに始まり、それに終るとしている。学問、文化、宗教を政治から切り離して、その上に置こうとする思潮や、政治と倫理を密接に関係づける思想は後人に教える貴重なものを含んでいる。

教育史の基礎

○ 専門的な平凡社の教育事典によると

彼の教育説は、各人が質料として有する素質を、人間生活の形相によって形成し、そこに人間の本質を顕現するのが教育であると説く。

人は本性上ポリスの生物であると考え、教育を国家と不離であるとした。まとめてみると、倫理学の父はソクラテス、哲学の父はプラトン、諸学の父はアリストテレスである。しかも彼の業績を復活したのは、メランヒトンであるが、哲学では独逸学派、教育ではウイルマンがその伝統をうけている。

○ 専門的な松浪氏の西洋思想史辞典には、総括して、詳細な解説が理解しやすく述べられている。その他多数の名著が刊行されているが、到底読破できるものではない。

有名な教育学の大家でも、自分の専攻部門以外は立ちどころに解答できるものではない。

上掲の各論述の共通項目を総合して、1行か、2行にまとめておくべきである。緊急の場合には、国語辞典や歴史小辞典、地理辞典、雑学辞典、新聞語辞典などでメモを作成しておくこと便利である。

人物に対しては、何時（時代）、何処で（国家）、何を（事績）為し、どんな影響（功罪）を残したかを型式として答えるのが普通である。

そこでアリストテレスであれば、

古代ギリシアの哲学者、プラトンの門人、論理学、倫理学、心理学、哲学、美学、政治学、自然科学などに通じ、諸学の父として、後世学術の基礎をひらいた人物である。

との程度でよい。

2) レオナルド・ダ・ヴィンチ

ルネッサンスの巨匠。絵画、彫刻、建築、自然科学などに活躍、典型的な万能人、*モナリザ、*最後の晩餐、が有名である。

3) ガリレオ・ガリレイ

イタリアの物理学者、天文学者、ピサの生れ、斜塔で落体の法則、寺院で振動の等時性発見、天体望遠鏡発明など近代科学の開祖、

4) 孟子

中国戦国時代の学者、政治の理想を説いて巡歴、孟子を書き、孔子と並び称せられ、性善説、江戸時代の儒教の本宗。

5) 森 林太郎

森 鷗外、文学者、医者。ドイツから帰国後、西欧の近代文学を紹介、歴史小説に新機軸、雁、阿部一族が有名、新劇運動にも貢献。

1) グレシャムの法則

英人グレシャムの発見した経済法則で、*悪貨は良貨を駆逐する、というもの、貨幣改鑄の

教育史の基礎

歴史でしばしば現れた。

2) エネルギー恒存の法則

外力を受けない物体の力学的エネルギーは一定、全体のエネルギーの総和は常に増減なしという法則。

3) マルサスの人口法則

英人マルサスの人口原理、人口は幾何級数（等比級数）的に増加するが、食糧は算術級数（等差級数）的に増加するので貧乏と悪徳が民衆にもたらされる。

4) メンデルの法則

オーストリアの牧師メンデルの発見した遺伝の法則、優劣、分離、独立の法則に分けられる。

5) ピタゴラスの定理

ギリシアの数学者ピタゴラスの発見、三平方の定理ともいう。直角三角形の斜辺を c 、他の2辺を a 、 b とすれば $a^2 + b^2 = c^2$ 。

1) 違憲立法審査権

裁判を行うに当たっての法令の適否、効力を審査し、憲法に違反していると認めるときはその適用を拒否する権能、司法権の優越を示す。日本では最高裁判所に権能がある。

2) 実存主義

他人や世間のこと、観念的につくられたものを否定し、肉体だけがただひとつの確実な存在とみて、そこから自己の世界を定めようとする現代哲学の代表的なもの。キェルケゴール、ハイデッガー、ヤスパースによって哲学の流派となり、サルトル、カミュ、カフカに影響している。

3) アレルギー

うるしかぶれ、じんましんに見られるように、ある物質に対する人体の反応が特に敏感になる医学用語であるが、核アレルギーのように過敏性などにも使う。

4) ppm

Parts Per Million の略で1ℓ中に含まれる重量を mg で表したものである。水道水中に含まれる塩素の量などを示すときに使用。

5) 核酸

ヌクレイン酸、プリン塩基、ピリミジン塩基、糖、磷酸からなる高分子化合物、動植物の核、原形質の中にあり、細胞の代謝、遺伝などに関係している。

1) ビーグル号航海記

ダーウィンが世界周航に際して乗った海軍の測量船の航海日記で、進化論を生む動機となっ

教育史の基礎

た。種の起源は世界的な名声を博した。

2) エミール

ルソーの小説体教育論、エミールが出生し、ソフィと結婚するまでの過程を記し、後世の民主主義教育の宝典とされ、全五巻、ペスタロッチーに影響。

3) 三四郎

夏目漱石の中篇小説、`それから、`門、などと三部作、東京の大学に遊学した高校生三四郎の生活を描く、老学者、科学者、女性の心理を描写。

4) 方法序説

デカルトの古典的な方法論、理性を正しく用いる方法の大切なことを論じた。

5) 古事記

稗田の阿礼が暗誦した日本の帝紀及び本辞を太安麻呂が筆記、高天原神話から、推古天皇までの歴史伝説、歌謡を収めてある好資料である。

以上の略説を参考として、選択の項目で些少でも良く知っているものを詳述すればよいが、日々の新聞、雑誌、テレビなどに登場した言葉が出題されている。

次に行を改めて、日本教育史に触れてみる。

どこの大学でも、教育史だけに単位を与えているところは珍しい。教育原理の講義の時に2～3回、西洋教育史を説明し、手頃の参考書を紹介することはあるが、東洋教育史とか日本教育史は、形式だけテキストを通読する程度であまり熱を入れない。

しかし民族の教育から考えて、外国以上に明白にしておくべきである。

その証拠として、第1回の第2問は次のようになっている。

次にあげる事項は、近代日本の教育についての事実ですが、これを時代の古いものから順に並べたとき、二番目と三番目に該当するものはどれか。ただし、二番目と三番目の順については無視してよい。

ア、小学校で使用する教科書について、検定制度を国定制度に変更した。

イ、「教育に関する勅語」（教育勅語）が發布された。

ウ、小学校の名称を国民学校と変更した。

エ、義務教育の年限を4か年から6か年に延長した。

これはア、イ、ウ、エの4問のなかで最古と最新をのぞけばよいのである。

日本の教育制度の年表を作成しておく、年代はともかく順序が記憶できる。

明治5（1872） 「学制」頒布

明治12（1879） 「教育令」公布

明治13（1880） 「改正教育令」公布

教育史の補綴

明治14 (1881)	小学校教則綱領制定
明治18 (1885)	「教育令」を再改正
明治23 (1890)	「小学校令」公布
明治23 (1890)	「教育に関する勅語」発布
明治33 (1900)	「小学校令」改正 尋常小学校4年を義務、公立無償の原則
明治36 (1903)	「小学校令」改正 国定教科書制度成立
明治40 (1907)	「小学校令」改正 義務教育年限を6年に延長
大正12 (1923)	国民精神作興詔書発布
大正14 (1925)	治安維持法公布
昭和16 (1941)	「国民学校令」公布
昭和20 (1945)	戦争終結 修身・日本歴史・地理の停止
昭和21 (1946)	「日本国憲法」発布
昭和22 (1947)	学習指導要領発行 「教育基本法」「学校教育法」公布
昭和23 (1948)	「教育委員会法」公布
昭和24 (1949)	「教育公務員特例法」公布
昭和29 (1954)	教育2法公布
昭和41 (1966)	「期待される人間像」発表

第1回の問題は上掲の年表によって解答ができるが、第2回のは日本の近代教育の実態を歴史的变化を中心として質問しているもので、個々の選択肢を理解していないと正解できない。江戸時代の寺子屋では、庶民の日常生活に必要な読・書・算を中心とする単純な事柄が□によって教えられた。この□のなかに、黒板、手習い、素読、学年制、徒弟制のどれかを入れるのであるが、無関係なものから順次消去していくと、手習いと素読が残る。そこで寺子屋という学習塾の性格を考えてみる。当時の百姓町人は文字を知らなければ経済競争に敗れてしまうので、文書を理解するかしないかは、死活問題であったので全国的に習字が重視せられ、上手に字を書く以上に、手習うことをとおして読むことをめざし、手習い読むことによって、日常生活の知識・技能を身につけ、躰にもしていたのであるから、手習いと答えるのが正しい。次は教授の方法についてである。即ち、

明治前期の小学校に導入された開発主義教授法は、ペスタロッチーの理論を基にしており、教授において、子どもの②を重視するものであった。□に記憶、体力、遊戯、直観、手先

教育史の基礎

の器用さのどれかを記入するものであるから、ペスタロッチーの教育思想を思い出し、直観を答解とする。明治初期の日本の初等教育史と西洋教育史の交渉が見られ、地域性と歴史性の連関が考えられる。もしもヤーンの理論なれば体力、フレーベルの理論とあれば遊戯とあるように、出題され易い人物のプロフィールを知っておくことである。

次は明治、大正の小学校の実態と教育思潮の動きを示すものである。即ち、曰く、

明治期後半からの小学校に流行した段階教授法は、子どもの多面的興味と主体的な個性の発展をはかるという本来の意味を見失って形式化したので、大正期の ㊦ によって、児童中心的立場から批判された。□ のなかに、文政審議会、労働運動、臨時教育会議、八大教育主張、岡田良平のどれかを入れるのである。各項目について略説をしてみると、文政審議会は大正13年に設置されたものであって、大正6年に臨時教育会議が岡田良平文部大臣により設置され、内閣直属の教育諮問機関として発足したのが臨時教育委員会となり、大正10年に教育評議会と変り、3転したものである。大正15年に幼稚園令が出たのもこの会の答申によるし、義務教育を8年制にしようとしたり、学校に兵式訓練を入れ、陸軍現役将校を学校に配属したりするのを答申した。

臨時教育会議は大正デモクラシーの潮流に対処するため、学校教育のあり方を国策に添うように努め、小学校5年から中学校に、中学校4年から高等学校へ進むことを認め、高等女学校に5年制を認めたりした。

岡田良平は大正5年に寺内内閣の文部大臣になって以来、忠良な臣民を養成することを教育の目的とし、学校劇を禁止したり、大正期のデモクラシーの自由主義教育を圧迫し、体制に忠実な人物である。

労働運動は児童中心の教育とあまり関係がないので省略すると、残りは八大教育主張である。当時の小学校はヘルバルト派の五段教授が一世をなびかせ、教授には生気がなかったので、これに反抗し、大正10年8月に八大教育主張の講演会が開かれ、児童、生徒の人間性の解放を主張、自由、表現、創作、個性、活動、作業、自発を骨子とした。

樋口長市の自学教育論

河野清丸の自動教育論

手塚岸衛の自由教育論

千葉命吉の一切衝動皆満足論

稲毛金七の創造教育論

及川平治の動的教育論

小原国芳の全人教育論

片上 伸の文芸教育論

次は昭和の初等教育の盛時に入っていく。

国民学校では、それまでの修身・国語・算術の教科目を統合して、国民科・理数科等を設

教育史の基礎

け、④を図ろうとした。とあり選択肢は、形式陶冶、個性教育、皇国民の錬成、自学自習、知育の徹底となっている。逐次項目を代入しても矛盾に注意できるが、戦時中の国民教育の目標は皇国民の錬成と直観的に悟るまでに到達すべきである。

次はいよいよ戦後昭和22年の学習指導要領（試案）の段階である。曰く、

「試案」としての学習指導要領では、児童の実生活における経験を重視した④が奨励された。項目は、仮説実験授業、モンテッソーリ法、プログラム学習、問題解決学習、ティーム・ティーチング。となっている。

仮説実験授業は辞典にもない場合があるが板倉氏の説で理科の実験の前に、予想を設定し、それを目標として授業をまとめる方法、モンテッソーリ法は、児童の感官を錬磨して、その育成のために独創的な教具を使うものである。

プログラム学習は、あるプログラムに基づいて、自己のペースで進める学習で、学習者のために教材を細分化し、適切な順序に配列するなど学習の技術的な分野である。

ティーム・ティーチングは教師の側の問題だから省くと、経験主義、生活主義に立ち、実際の作業を中心とする問題解決学習が正解となる。

最後は最も新しい、思考を要しないクイズ式のものである。即ち、

小学校の1学級の児童数は、学校教育法施行規則（昭22）では50人以下を標準とすることになっているが、公立義務教育諸学校の学級編制及び教職員定数の標準に関する法律（昭33制定、昭44改正）では④を標準として、都道府県の教育委員会が定めることになっている。各項目は、65人、55人、45人、35人、25人、となっている。正解は現行の45人であるが、教壇生活に入っていない人達は失念しているかも知れない。

以上で所定の枚数を超えたので中断するが、試問全体の2割弱、教育史に関する部分を抄出した。熟考するには僅かな時間しか配当されていないので、第六感でも、勘でもよいから、空白の個所に記号を入れることである。経過は問うところではない。終結が肝要である。テストの運命観は面白いものと知って欲しい。

（大学音楽学部 教授）